

コラム 33：ワンちゃんとの出会い

(2014.8.25)

やっと<彼女>のウンチを始末して戻ると、私のスリッパがありません。振り返ると、それを口に咥えてキュートなお尻が向こうにスタスタ。やっと取り戻して椅子に戻ると、今度は私の愛用のヘッドタオルを咥えて激しく振り回して……<彼女>が家に来て一カ月半、私たち夫婦の生活は一変しました。まず<彼女>の口の届く範囲から物を撤去、あるいは金網で防御しました。リビングからカーペットを除去し、板の間になりました。トイレの失敗に対応するためです。そして、生活空間だけでなく、私の生活のリズムも変わり、夫婦の会話の内容も、ほとんどがワンちゃんを中心、となりました……

この辺で<彼女>を紹介しておきましょう。種類は「コーギー」正式には「ウェルシュ・コーギー・ペンブローク」と言います。英国で生まれた犬種です。大きな耳と胴長短足、短い尾が特徴の中型犬です。今年の3月15日生まれ、現在は生後5か月になるメスのワンちゃん。名前は「ベリーちゃん」といいます。私がイチゴを作っているので、英語の「ストロベリー」を取って、妻が命名しました。生まれは和歌山県ですが、私が<彼女>と出会ったのは、長男の住んでいる兵庫県明石市です。

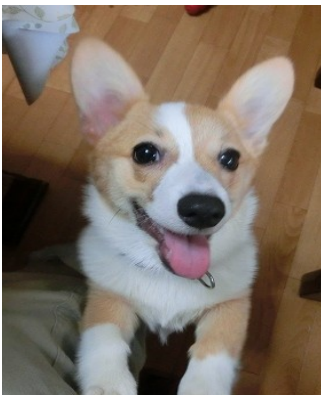
6月の終わりに、長男宅に妻と車を走らせて行ってきたのですが、帰りに大変な「手土産」を持ち帰ることになりました。「ベリーちゃん」のことです。私も妻も取り立ててワンちゃんが欲しかったわけではありませんでした。息子が連れて行った近くのペットショップへ行き、<彼女>を抱いてやると、話が変わってしまいました。ムチャクチャ、カーワイイのです！前足をすがりつくように差し出して抱きついてくるのです。そして、腕の中でじっと潤んだ目で見て、ペロペロなめてきます。あまりの可愛さに、私も妻も離せなくなってしまうのです。そこで、すかさず三歳の孫娘が「ジイちゃん、コーちゃん飼って！」……もうダメです。「ヨーし！広島でワシと暮らそう！」となってしまったわけです。



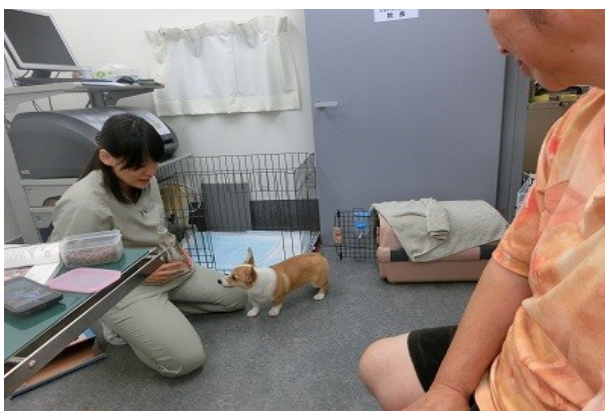
この話には少し「前置き」がありますので、それを話さないと理解してもらえないでしょう。私が<彼女>に会う2か月近くも前から、毎週のように息子からコーギーの写真付メールが入っていたのです。5月の初め頃から、娘に抱かせて、なつかせていたようです。私たちも、「カワイイね」と思いつつ、「困ったもんだ」という感じで、本気で考えていませんでした。妻は「飼うんだったら離婚だからね」と、訳のわからない「脅し」をしてきました。私自身も、2年前に父の飼っていた犬と「不幸な別れかた」をして以来、もう犬は飼うまいと思っていました。どうしてこういうことになったのか、私にもよくわからないのです。息子の「策略」にはまったという面もありますが、<彼女>の「訴えるような瞳」に、私ばかりか、「離婚宣告」をしていた妻までも、冷静な判断を見失ったのかもしれない。それは今考えると、「運命の出会い」であったということなのでしょう。

しかし、広島に連れ帰ってまもなく、私たちの考えの甘さに気づくことになります。私も妻も小さい時から側に犬がいましたが、それは家の外で小屋につないで飼う犬です。「室内犬」というのは全く違うということがわかってきたのです。生活空間の設定、トイレの躰、噛み癖や吠え癖の矯正、そして＜彼女＞の遊び相手や躰をするための「オモチャ」や「オヤツ」の購入等々……いろいろと大変なのです。＜彼女＞のシモベとなって、オシッコとウンチの始末をすることも大変ですが、いっしょに遊んでやるのが大事なことです。まだまだ子供ですから、やたらと遊びたがります。最初は、その動作と姿が実にカワイイと思うのですが、私たちはすぐに重大なことに気づいたのです。

動きが異常に素早く、かつ激しいのです。全速力で家の中を走り抜まわります。そして、まるで本塁に突っ込むランナーのごとく、スピードを緩めないで、そのままドーンと胸に体当たりしてくるのです。オモチャで遊んでやると、異常な速さで追いかけてまわし、噛みついたら、白目を剥いて唸り声をあげ、決して放そうとしません。「少女」ごときカワイイ顔が、一瞬にして「鬼女」のようなすさまじい表情に変貌するのです。コーギーは表情の変化が実に激しいことがわかりました。＜彼女＞の「激しい愛」の表現に驚いて、本で調べてみました。すると意外なことがわかったのです。



コーギーというのは愛玩犬ではなく、本来は牧畜犬なのです。カラは小さくても、本来は牧場で牛を追回し、牛のからだの間を潜り抜けるための胴長短足なのです。＜彼女＞が私のズボンの裾を噛んでくるのは牛のヒールに噛みつく習性、と考えれば納得できます。尻尾がないのは牛に尾が触れると蹴飛ばされるので改良されたようです。これで納得がいきました。道理で、相当な身体能力と、激しい気性を持っているはずで、今からしっかりと躰をしていかないと、癒されるどころか、手におえない「猛犬」になりかねません。



妻が必至の思いでネットで探し、動物病院で躰レッスンをしてくれる所を見つけ、とにかくそこへ行って相談してみることにしました。広島に連れ帰って間もない、7月中旬のことです。それから、毎週のように1時間の躰レッスンに二人で通い、週に1回2時間の保育園(委託訓練)をお願いしています。始めた時には生後4か月、躰の出来るギリギリの状況でした。時間と経費はかかっても、もう後戻りはできません。1か月半が経過して、「犬の気持ち」がわかるということは大変なことであると実感しています。トレーナーさん

に言わせれば、コーギーは室内犬として問題のある犬種のベストスリーに入っているそうで、「難易度が高いワンちゃんですよ」とのこと。私たちは愕然とし、＜彼女＞について、あまりにも無知であつたと思いました。

私が室内犬という飼い方にこだわるのは、以前より鎖でいつも繋がれている犬を見て、かわいそうに思ってきたからです。私の幼少期には、普段は軒下の小屋につないでおき、朝夕は放して運動をさせ、腹をすかして帰ってきたら食事を与える、という飼い方でした。時に他の犬と喧嘩して血だらけで帰ってきたり、よその人を噛んだり、といったトラブルはありましたが、そのようなことがあまり問題にされない時代であったのでしょう。「外の小屋につないで飼う」というのは、意外に日本独特のやりかたのようで、私の知る限りでは、欧米では見かけませんでしたし、中国などでは、犬が自由に歩き回っていました。(コラム2:中国の旅のこと 参照)



最近、私の家の庭や畑に猫の親子が3-4匹で姿を見せます。どうやら私の家を遊び場と決めたようです。見てみると、子猫は親猫の後について回り、動きをまねたり、ジャレついたりしているようです。こうして生きていくための術を体得しているのでしょうか。考えてみると、ペットショップで飼われて



いるワンちゃんたちは、早くから親から離され、親に甘えることも、活きる術を教わることも出来なかったはず。＜彼女＞は初対面の人に対して、妙に愛想を振りまきます。帰省してきた子供たちが、乱暴な抱き方などをして、ジッと耐えて遊んでくれます。眠る時には、「ハウス」という小さなカゴに入れるのですが、その中では決して吠えたりしません。もしかしたら、それらは＜彼女＞がペットショップ生活で身に着けた、「悲しい処世術」なのかもしれません。

そう考えると、一人ぼっちにした時の、「不安」と「寂しさ」のどん底のような、もの悲しい表情の説明が付きまします。「捨てられる」という恐怖を感じているのでしょうか。＜彼女＞にとって私たちは親代わりなのです。私たちは「犬を買った」のではなく、「養子縁組」をしたと考えるべきなのでしょう。出会いから2か月、＜彼女＞の顔は、子犬から成犬に近づき、体重も(8/25 現在) 2.9キロから4.6キロに増えました。ワンちゃんの成長は凄まじく速いのです。私に残された人生が、どれだけあるかはわかりませんが、ともに歩んでゆくことになります。「どっちが先に逝くか」という問題は残りますが、人生の「いい伴侶」になって、お互いに幸福になりたいものです。

「人間もナゴウ生きとると、嫌なこともエツとあるし、これから先の不安もあるんじやが、ワンちゃんを見とると、不思議と皆忘れてしまうよう」

